THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS
日刊建設工業新聞
2019年（平成31年）1月22日（火）
第19590号
記事 電話03－3433－7161 mail-ed@decn.co.jp　購読 電話03－3433－7152 mail-sa@decn.co.jp　広告 電話03－3433－7154 eigyo@decn.co.jp
発行所 日刊建設工業新聞社 〒105－0021 東京都港区東新橋2－2－10 電話03(3433)7151 https://www.decn.co.jp/
©日刊建設工業新聞社 2019

明治維新150年と治水の歴史

竹林征三

〈45〉那賀川・利水治水とも深刻

日本有数の多雨地帯の四国山地を水源とする那賀川が連年の渇水で瀕死（ひんし）の状態にある。1995（平成7）年は工業用水の取水制限率80％が50日間に及んだ。以下同様に、▽96（平成8）年に同20％64日▽97（平成9）年に同20％60日▽98（平成10）年に同20％14日▽99（平成11）年に同30％59日▽2000（平成12）年に同20％36日▽01（平成13）年に同80％25日▽02（平成14）年に同30％22日▽04（平成16）年に同10％4日▽05（平成17）年に同100％113日▽07（平成19）年に同60％75日▽08（平成20）年同20％33日▽09（平成21）年に同60％73日▽11（平成23）年に同60％33日▽13（平成25）年に同50％64日―など、18年間のうち実に14年間は取水制限が実施されている。

それも100％、80％、60％などの中途半端な制限ではない。取水量がゼロでは工場は生産ラインが動かせない。09年の渇水時には阿南工業用水を利用する事業所の生産活動に深刻だとし、県は隣接する那賀川同様50％の取水制限中の吉野川北岸工業用水から1日1000立方㍍の工水を1隻・1日当たり数百万円の運送費をかけてタンカー輸送までしている。連年の取水制限で地下水取水も極限まで進められて、地下水の塩水化が進んだ。

一度塩水化が進めば復元は難しい。県南の一大工業都市として急発展を支えてきたのは那賀川の豊富な水であった。その水がこのような瀕死の状態では、発光ダイオードの生産量で世界一（世界生産の約20％）を誇る県南の一大阿南工業団地が今後、衰退してしまう可能性がある。

1893（明治26）年の夏、梅雨明け以降50日余にわたり日照りが続いた。このため川北地区の農民が鍬を持って、2㌔の水路をわずか10時間で造った。これを聞いた南岸各村の農民も手に手に鍬を持って参集。警官数十名の制止も効果がなく、双方入り乱れて3日間にわたる大乱闘となった。

1977（昭和52）年8月の渇水会議では、漁連が「堰堤からの漏水のみしか下流に流れず、それさえ直下流の神崎で吸い込まれ、下流には河流は全くない」、企業側が「現状では節水操業は困難、操業停止以外に対応策はない」と主張した。

一方、洪水の方も深刻である。▽04年8月浸水面積111㌶▽同年10月165㌶▽05年121㌶▽09年143㌶▽11年9月152㌶▽14（平成26）年168㌶（床上浸水543戸）▽15（平成27）年140㌶―と、12年間に8回も大洪水被害が連続している。

「那賀川水系の既存発電ダムは堆砂が進み環境を破壊した」と、堆砂が進んだのはダム建設が原因だとされてしまった。木頭村は古来より林業・木頭杉の盛んなところで、戦後の拡大造林政策で植林可能なところは皆伐法で伐採された後は再植林と森林開発のために林道が開発された。杉の間伐が急務とされる頃に林業不振で山の手入れが十分なされず、山林荒廃し堆砂が進んだ要因となった。

一方、治水利水の切り札だった細河内ダムは、徳島県、阿南市、土地改良区も建設推進に積極的だった。地元の木頭村もダム反対派は少数であった。しかし、反対した一人の村長をマスコミは「一人で国のダム建設を止めた男」と英雄としてたたえた。その結果、2000年に中止へ追い込まれている。本当に細河内ダムの中止は流域にとって良かったのであろうか。

エジプトはナイルのたまものという。那賀川流域にとって那賀川の水は文明の全てのベースである。

那賀川における水利用は農業用水約37立方㍍／秒、工業用水約6立方㍍／秒の合計24立方㍍／秒である。約3750㌶の農地、そして5カ所で工業用水を取水している。この膨大な水利権量をまかなうことのできる河川の自流が果たしてあるのであろうか。これまでに水源手当のダム貯水を確保してきたのであろうか。那賀川を救う真の英雄は何故出現してこないのであろうか。

〈参考文献・『物語日本の治水史』鹿島出版会〉

（常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所会長）

＝週1回掲載